俺と童女と聖杯戦争

For152th-715

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺と童女と聖杯戦争

【Ｎコード】
Ｎ５６５６Ｙ

【作者名】
Ｆｏｒ１５２ｔｈ－７１５

【あらすじ】
なかなかのダメ人間が、ありがちな神様の手違いで型月の世界に転生して巻き起こす騒動記。
オリキャラ無双、独自解釈・設定、原作魔改造を含みます。

プロローグ（前書き）

本作は作者の妄想と怨念と暗い目的でマミった――もとい、塗れたかなりヤバめの二次創作です。
とかく酷い内容なので、頭痛が痛い状態になる可能性が十分あります。
皆様のご健康というか精神衛生のため、気分を害したらすぐに読むのを止めて下さい。
万が一ご気分を害した場合は、コメント等で暴言を吐くと症状が改善する可能性があります。
ご自由にお使いください。

プロローグ

気づけばそこは、だだっ広い真っ白な世界だった。
えらく殺風景なこの空間で俺が何をしているかと言えば――

「ごめんなさいっ！　本っ当にごめんなさい！！」

と、平身低頭で謝られていたりする。
理解不能な事態だ。何故、どうしてこんな状況になったのやら、全く理解が出来ない。
道で躓いてコケたと思ったらトラックが突っ込んで来て、気づいたらこの空間に飛ばされていて、唐突に現れた自称・神様に「貴方が死ぬ予定はなかった」「こちらの手違い」などと言われ、そして今現在はその自称・神様に平伏で謝られている、と。
あ、駄目だ。回想してみたけどワケわかんないわ。

「あの、えっとですね、そんな謝んなくて大丈夫ですよ…？」

初対面の人物に、いきなりこうも平謝りに平謝られると気まずいことこの上ない。
ので、とりあえずこの妙に低姿勢の自称・神様をなだめる事を試みる。
と言うか、もっと詳細な状況説明をしてくれ。

「え…状況説明ですか？」

「まぁ、正直事情が分からないのでもっと詳しく解説してくれると……って、え？」

あれ？　俺いま何か喋ったっけ？

「あ、いえ。私、これでも神ですので、思考を読むくらいは簡単なんですよ？」

……マジですか？

「マジ、です」

凄いな、流石は神様。

て……いや、待て。ということは、今までもこれからも俺の思考はダダ漏れなのか！？

「大丈夫ですよ？　いくら神でもプライバシーへの配慮くらいはしますから」

「……いや、既に完璧に思考読んでんじゃん」

あはははは、と目を逸らす自称・神様。

この人（？）本当に大丈夫なんだろうか？

「まぁ、とにかく。ここは何処で何がどうしてこの状況に？」

「色々と説明しにくいんですが…。そうですね、まずはこの場所は死後の世界的なアレです。で、貴方は死にました」

え…？　なん…だと……？

「――俺が、死んでる？」

その途方もない事実に俺の頭の中は真っ白に――

「いや、貴方内心ではそれ受け入れてるじゃないですか。そんな驚いたフリしないでくださいよ」

――なったりはしない。

この自称・神様の言う通りだ。俺は今、妙に落ち着いた気分で自分が死んだこととか、目の前にいるのが神様だとか、その他諸々の超常現象を受け入れている。

とは言え、やっぱりこう…絵面的に驚くところだろ、ここは。

「まぁ、確かにそうやって驚いてくれると、こっちとしては説明しがいがあって嬉しいですが……」

「じゃあ別にいいじゃん。ほら、続き続き」

「あの、貴方は私が神様だって分かってるんですよね？　もう少し敬意払うとか…？」

だって、なんか妙に人間臭くて敬意とかちょっと……。

まぁ別にいいじゃん。ほら、続き続き。

「面倒だからって思考で返事されると流石に悲しいですよぉ…」

「……まぁ別にいいじゃん。ほら、続き続き」

「うぅ…。あの、それでですね、貴方が死んだのはこちらの手違いでして、つまり貴方はあそこで死ぬはずの人間じゃなかったんです」

「はぁ、なるほど」

「いや、『なるほど』って…。これ、そこまで軽い話じゃないですよ？　本当に大丈夫ですか？」

問題なく分かってる。理解もしてる。そしてなんか既視感がある。

「でも、一度死んだ人間を生き返らせるのは無理なんです。どうやっても、どうしたって、神であっても。
本当にごめんなさい。私は、取り返しのつかないことをしてしまいました」

「……」

深々と頭を下げてくれる神様。その真摯な姿勢からは、ひしひしと誠意が伝わってくる。
くる、のだが…。なんだろう、この既視感？

「それで、その、代わりとも言えないんですが、貴方をお好きな――」

「お好きな世界に転生させてあげます、とか？」

「！！」

ああ、なるほど。この展開、いつぞやネットで読んだ小説の展開にそっくりだったのか。どうりで納得の既視感。
いや、それにしてもこの神様、俺の思考が読めるんならそんな驚かなくても良いのに。

「違いますよぉ。まさか、私の渾身のお詫びが人間の小説と同程度

の発想だったなんて…」

あー。なるほど、そっちか。

確かに神様にしては貧相な発想力な気がする。

「ひ、貧相とまで…。わたし、神様なのに…。

と、とりあえずどうですか、この提案？」

「うーん。まぁ確かに魅力的と言えば魅力的かもしれない」

漫画やらアニメやらラノベの世界に入り込む、というのは男なら一度は想像したことがあるはずだ。

かく言う俺も、大いに身に覚えがあるので、少なからず心踊る部分がある。

「でしょうでしょう！　それでですねぇ、貴方にご用意したのは、なんと型月の世界です！」

おお、それはなかなかグッドなチョイスだ。

Ｚｅｒｏ読んでＥＸＴＲＡプレイしてあとはｗｉｋｉ読んだくらいの知識しかないけど、月姫・Ｆａｔｅ・空の境界の世界に入り込めるとなると、否が応でも期待が高まる――のは良いとして、

「なんで神様が型月とかいう俗語知ってるの？」

「それは、このために貴方の記録を漁って嗜好やらなにやらまで全部チェックしましたから。貴方が知っていることで、私が知らないこととかあり得ません。まぁそれに、ちょっと本気出せばわりと全知全能なので、私」

それは凄い。凄いんだが……

「……おい、俺のプライバシーはどこ行った？」

いやもう嗜好まで丸バレとか、程度によっては悶死するレベルだわ。

まさか俺のストライクなキャラとかまで知られてないよな？

「――さて、それでは早速、行ってみましょうか！」

いや、完璧に話逸らしてるだろう。というか、その微妙な間で明らかにアウトだ。

「…総合神様連合ハ、オ客様ノぷらいばしーニ配慮シタ個人情報管理体制ヲ敷イテオリ――」

「いやもうそういうのは良いから。いい加減にしろ」

この神様（暫定）にこれ以上付き合ってると、頭痛がしてきそうだ。

さっさと話を進めて欲しい。

「あ、良いんですか？　じゃ、話進めますねー」

……また思考読んでやがる。しかも反省ゼロだろ、この神様（仮定）は。

「えっと、貴方のために型月世界での容れ物を用意しました。詳細はさておき、性別は男。あ、あと飛ばされる時間はおおよそ第四次聖杯戦争の十年前となっています」

「ふーん。で、その容れ物とやらの詳細は？」

「まぁバッチリ用意してますけどぉ…。どうです？　最初からネタバレされるより、自分で自分の力を探り当てていく、ってのが燃えませんか？」

「う……」

鋭いところを突くな、この神様（暫定）。俺の趣味をよく把握してやがる。

でも、事前知識なく行くのも不安だしな……。

「心配しなくても大丈夫です。あなたの趣味は完璧に読みきって、完全にご満足いただける世界をご用意しました！」

確かに、この神様（暫定）の読心能力はかなりのものだし、それなら心配はいらない気もする。

「――よし、じゃあそれで頼む」

「はい！　では、１名様ご案内で～す！」

突如、ガタン、と足元から音がした。

「は？」

間抜けに声を出して下を見ると、ぽっかり黒い穴が空いていた。

「い、いきなりですかぁーッ！？」

そうして、叫びながら落ちていく俺は、

「Ｙｅｓ！　Ｙｅｓ！　Ｙｅｓ！」

と叫び返す神様（断じて認められない）を見て激しく後悔しながら、暗闇へと意識を手放していった――。

プロローグ（後書き）

作者「プロローグというかありがちなテンプレなので、本編開始はまだ先です」

作者「さらに言うと、次話になってもまだ『意味のある』小説にはなりません」

???「え～、そんなのつまんない」

???「ねぇねぇ、出番はまだかしら？」

作者「つまらなくていい……わけじゃないけど、待って下さい。それと、君達の出番はずっと先です」

???・???「え～～」

0．　始まりの記憶（前書き）

１話でなく０話、内容的にはプロローグその２です。
よって、未だ本編は開始しません。

0. 始まりの記憶

目覚めた場所、そこは赤い世界だった。

赤い。赤い。赤い。

真っ赤に燃え上がる空と、真っ赤に染まった地面。

何があったのかは分からない。

何かが起きて、何かが来て、何かがこれをやったのだということは理解していた。

隠れなければ、と本能が告げている。

隠れなければ死ぬ。隠れてもきっと死ぬ。

もしかすると、どうやったって違いなど無いのかもしれない。

それでも死にたくはないので、じっと息を潜めて物陰から赤い世界を見つめている。

けれど、終わりはすぐにやって来た。

赤い火の向こうから、赤い衣を纏ったソレは現れた。

火などなんでもないように泰然と歩くソレは、近くに隠れていた××をあっさりと斬り殺して、黒く乾きかけていた地面を、再び赤で染めた。

隠れるとか逃げるとか、そんな発想が浮かぶ余地すら無い。

燃え盛る焔に浮かび上がる鷹のような目に捉えられたその瞬間、あっさりと自分の死を受け入れさせられた。

××××××——彼に狙われたのなら、自分なんかに生き延びようは無い。

妙に間延びした時間の中で、何時か何処かで見知った顔を見つめながら終わりを待つ。
炎の照り返しに鈍く光る刃が一対。あれならば、この命も速やかに摘み取られるだろう。
何故とかどうしてとか、そんな事すら問う猶予もない。この二度目の生は、こうして開幕と共に幕を下ろす定めだったのだと、疑問も憤りもなくそう受け入れた。

そうして。一際鋭い煌きを残し、翻った剣が身体を裂いた。
痛みを感じる余地すら無く、吹き飛ばされて熱い地面を転がっていく。
傷が灼けるのか、炎が身体を焦がすのか。身を包む熱の意味すら分からず、ただ倒れ伏す。

これで最期か、という諦観に、身体の力が自然と抜けていく。
しかし、霞んだ目はやがて焦点を結び、いつの間にか自分を見下ろしている彼と、幾つもの肉塊を斬り捨ててなお寸分の曇りもない一対の剣を映していた。

「『世界』め……。成る程、今回の掃除(仕事)はここまでということか」

誰に聞かせるでもなく呟かれた言葉は、けれど何故か自分には確と届いている。
だが、揺らめく火影と、視界を流れる奇妙な光、それらに掻き消されて彼の表情は窺えない。

「私が殺せなかったということは、君はここを生き残る事が運命な(必要)

のだろうな。
――いや、むしろ君のためにこの場の人間の命は奪わなければならなかった、というところか」

祝福のように、呪いのように。静かに紡がれるその独白は、ゆっくりとこの身体に染み入っていく。

「君と私は違う。だが、『世界』の操り人形であることに変わりはあるまい」

刹那、光が途切れて彼の顔が露になる。その顔は嘲るように、憤るように、酷く苦々しく歪んでいた。
同時に、とす、と驚くほどにあさっりとした音を立て、冷たい何かが落ちてきた。
吐き気を催すような冷気が、心臓の上に蟠(わだかま)る。

そして、目に写る景色が、霞むように消えていく。
ああ、この目がついに用を為さなくなったのか。

――いや、違う。消えているのは彼の方だ。
現れた時と同じく、彼は溶けるように消えていく。誰の目にも止まらず、誰の記憶にも残らずに。

「生きろ。君の命が誰の手に在ろうと、生を願うその意思は君だけの物だ」

最後にそれだけを言い捨てて、彼は何処かへと帰っていった。
誰かがいた痕跡も、何かがあった記録も、こうして思い返す記憶すら薄れていく。
彼――××××××という存在を完全に忘れ却り《わすれさり》な

がらも、ただ1つ、「生きろ」という最後の言葉が残響している。

胸に突き立つ冷たい温度と、緩慢に打つ心臓の音と、暗い世界に渦巻く光の流れを感じながら、”俺”は今度こそ意識を手放した――。

0．　始まりの記憶（後書き）

？？？「少々扱いが酷くないかね？」

作者「不幸な人の言葉に貸してやる耳はありません。ここで出番作ってやっただけでも有り難く思ってください」

？？？・？？？「ねぇねぇ、出番――」

作者「まだだよ！」

1.　目覚める時（前書き）

そんなこんなの第1話です。
内容的には導入部。本音的には蛇足。正直的には苦行。
いや、文章でダラダラ説明すんのって難しい。

1.　目覚める時

――何カ、夢ヲ見テイタ気ガスル。

目を覚ました場所、そこは見知らぬ殺風景な部屋だった。
身を起こそうとすると、身体の節々が酷く痛む。見れば身体中に包帯が巻かれていて、どうやらこの身体は満身創痍であるらしい。

コノ、身体……？

はて、と首を傾げる。
何かどうしようもない違和感を覚えている。
上手く言えないが、まるでマイナスドライバーでプラスのネジを回そうとしているように、どうにもしっくり咬み合わない感覚。
回らない訳ではないが、やりにくいし妙に気持ち悪い。そんな感じだ。
とはいえ、何と何が接合できていないのかも分からないし、当然対処のしようも分からない。
つまり、解決不能ということだ。

形容しがたい居心地の悪さを感じながら、目的もなく握ったり開いたりを繰り返す手をじっと見つめていると、ふと部屋の外に人の気配がある事に気付いた。
人がいる、というその事実に、今更ながら現状を再認識する。
見知らぬ部屋にいて、その理由も知れず、どうやら此方の様子を窺われているらしい。
平穏とは明らかに言い難い事態。空転していた脳は目を開き、急速に覚醒する。

――損傷、自立行動困難

――事由不明。記憶検証から推定

――実験。霊子観測機

――アセトの雫。詳細不明

――結果、不明

――霊子観測演算実験に伴うトラブルと推定

――現状、不明。推定開始

――提示不可

――要素、過少。推定不能

頭の端を切り離したような、馴れ親（キモチノワルイ）しんだ思考を動かし、可能な限り現状を推測する。

保持知識の取捨選択。獲得情報の論理整合。構築理論の脆性補完。提示予測の要性検討。

種々の工程は分割され、統制され、包括され、上程され、結論される。

分割思考と高速思考。

未だ家名を名乗る事を許されてはいないが、いずれアトラス院の

扉を開くことを求められるこの身にとっては、この程度の思考作業は造作もない。
とは言え、いくら頭が速く回ろうと、今の自分が満身創痍でロクに動けないチビた子供であることは変えられない。
はっきり言ってこの状況を打開する方策などなく、我が優秀なる分割回路によれば、大人しく出方を伺うのが上策であるらしい。それならば――

「反抗する気はありません。どうぞお入り下さい」

びくり、と壁の向こうで人が動いた様子がありありと想像できたが、そんな事はどうでも良い。考えるべき問題は、ここから先、相手がどう出てくるかだ。
そして、やや間があって、部屋の扉が開かれた。
入ってきたのは、壮年の男。髪は完全に白く染まってしまってはいるが、まだそれほどに歳を重ねてはいないはず。おそらく４０代だろう。
男は部屋の隅にあった椅子を引き寄せてきて座ると、ゆったりとした口調で話し始めた。

「まさかあんな風に気付かれるとは思っていなかった。正直に言って驚いたよ。その歳であろうとイルマステマの錬金術師には変わりない、ということか」

「……自分はまだ家名を名乗る事も許されてはいません。それは買い被りでしょう」

イルマステマ。その名を知っているということは、この男は魔術を知る者。いや、十中八九、アトラス院の錬金術師と考えて良い。
ならば、誤魔化しは無意味だ。記憶の読み出しに長けた錬金術師

であれば、自分の記憶を強引に引き出す位の事はわけもない。
だが、単に情報が必要であるのならば、こうして自分が生かされていることに理由が見出だせない。記憶の読み出しなど、脳髄がさえあればこと足りるのだから。
生かされているのは、生かしておく価値があるからだ、と結論する。ならばそれを利用して情報を引き出す。得るべきは、この男の所属、目的、あるいは要求――。

分割思考を働かせて高速演算を行う俺を見て、だが男はあっさりと言った。

「ああ、なるほど。まだ名乗っていなかったな。すまない、警戒させてしまったか。
私はシアリム・エルトナム。今回の件で。今回の件で、院から処置について一任されている者だ。一応、これが委員会からの正式な要請になる」

差し出された書類には、アトラス院院長の名で、イルマステマの関係者全てに、派遣される人物――シアリム・エルトナムに協力するようにと記されていた。
曰く、貴家の実験は神秘の秘匿を侵す虞(おそれ)があると認識する。即時の凍結と査察者への協力を請う。
これは体裁こそ要請でも、その実態は実力行使をちらつかせた命令に他ならない。
院が本気であることは、エルトナムが派遣されてきた時点で察していたが、それにしてもここまで徹底されているとなると、軽々しく結論は出し辛い。

「――それで、家の生き残りは自分だけですか？」

院からの離反か、秘匿研究の開示か。
時間稼ぎをするため、わざと後回しにしていた、答えなど分かりきった質問をぶつける。
だが、この問いにシアリムは何故か気を害したらしい。問いの答えは、ややの間を置いて、苦々しい顔で返された。

「気の毒なことだが…その通りだ。あの廃墟で発見されたのは――イルマステマの系譜で生き残ったのは、君だけだ。
つまり、今、君はイルマステマ当主の座にあることになる」

完全に予想通りの答えだ。
そうでなければ、エルトナムの錬金術師がわざわざ自分などの所に派遣されて来ることなどあり得ないだろう。
話を通すならもっと上の人間にすれば良いし、こんな子供に彼の”仕事”をしても仕方がないのだから。

「分かりました。では、イルマステマ当主、ルイス・イルマステマ・メスケネトの名の下、イルマステマはアトラス院の調査に最大限協力することを約束します」

『探求は全てに優先せよ』がイルマステマの家訓だ。たとえ研究内容を漁られようと、現状で院に楯突くのが非効率なのは明白だ。
第一、この男の言によれば屋敷は「廃虚」と化しているという。何が起きたのかは分からずとも、それほどの規模の事故ならば屋敷跡で情報を得るにも限界がある。そして、自分程度が知っている情報も限られている。
失う情報は多い。だが、それは自分には関与し得ない問題だ。そして、この約束を交わしたために過分に奪われる情報は無いと言って良いはずだ。

もっとも、それはこの男がどこまでの”仕事”を任されているかによる。もしも院がイルマステマを完全に切り捨てる気ならば、ここで脳髄をくり貫かれる可能性すら十分にある。そしてそうなった時、自分がこの男に抵抗できる可能性は皆無だ。

シアリム・エルトナム。彼の名は、院内でも屈指のホムンクルスの創り手として伝え聞いている。

もしも今、彼によって創製された戦闘用ホムンクルスが待機しているならば――いや、居ないはずがない。少なくとも、現状では勝算が全くない。

返答次第によっては死も覚悟しなければならない、と内心身構えた自分に返された言葉は、しかし実に予想外のものだった。

「そうか――ありがとう。いや、感謝する、当主殿」

そんな、心の底から安堵するような言葉。

想定外どころか、あり得ない。相手は、アトラス院からの回し者で、何より悪名高いエルトナムの人間。

――ソシテ、××ノ×ダ。

「え……？」

何か、聞いてはいけないものを聞いた気がした。

耳を傾けてはならない声。意識を向けてはならない部屋。そんな、喩えようのない悪寒が身体を走る。

「何か？」

「い、いえ。すみません、少し傷が痛んだので」

だがそれも刹那のこと。脳は身体とすぐに調和し、速やかに正常な動きを取り戻す。

「イルマステマは院と長く同じ時を過ごしてきました。我々の不始末であなた方を煩わすわけにはなりません」

神経は滞りなく走り、言葉は淀みなく流れる。

状態は至って正常。そう、正常だ。

今の妙な感覚は、きっと彼の人の良さに気が抜けたとか、そういうことだろう。なにせ、こんな事で

「改めて感謝を、ルイス殿」

なんて嬉しそうに感謝を返すような人物なのだ。

これなら、毒気も緊張もすっかり抜け落ちても仕方がないというものだろう――。

と、そんなこんなで時間が経つこと一時間弱。

俺は、シアリム氏のアトラス院の錬金術師らしからぬ人間臭さにあてられて、つい話にのめり込んでしまっていた。

まずは互いの自己紹介に始まって、所属やら研究の概要やら。そのうち俺の口調が普段のものに戻っていてそれをシアリム氏に指摘されたり、それを言ったらそちらもかなりフランクになってると指摘してみたり、奇妙なほどに会話は弾んだ。

そして、現在。

「――と、このように限定条件下であれば霊子体を投射することは可能であるはずだ」

「はぁ…なるほど。でもマナの影響の排除は不可能じゃ？」

「まぁ確かにな。だが、あるいは世界が滅びるような事態が起これば可能かもしれない。研究しておく価値はゼロではないだろう」

「…一応訊きますけど、世界が滅びても生き残る自信があるんですか？」

「いや、無いな。全く。だが、それとこれとは別問題だ」

俺とシアリム氏は、物凄い勢いで机上の空論を戦わせていた。

最初は、幾つかの理論に関する単純な意見交換だったのが、いつの間にか逸れに逸れてここまで来てしまった。

個人的に言わせてもらうと、ここまで話が明後日に歩き出してしまった原因は、語りが一々妙に巧いシアリム氏にあると思う。

でなければ、ここまで馬鹿らしい話がこうも長続きするわけがない。

「そう言えば、話は変わるのだが――何故か君は、その話し方だと違和感がないな」

はて。本当に話が飛んだな。まぁ構わないが。

「違和感ですか？　そんなに変な言葉遣いでした、今までの俺？」

「いや…いや、確かにそうだな。何と言うか、始めの頃は妙に話し馴れていないような雰囲気があった。今も変わってはいるが、しか

し自然体に感じられる」

話し馴れていない、ね。

まぁ確かに地の口調はこっちだけど、今まで人前ではあっちの口調でしか話した事無かったし、馴れてないとまでは無いと思うが。

と言うか、それ以上にの問題として――

「この話し方、そんなに変ですか？」

「少なくとも7歳の少年の口調ではないな。アトラス院の錬金術師ともなれば、なおさらだ」

「なな、歳……？」

「違ったかね？　院から渡された君の経歴には7歳6ヶ月とあったが」

7歳。うん、そうだ間違いはない。流石に自分の年齢を間違えたりはしない。

だと言うのに、何か妙に引っかかるのは何なんだろうか？

「あー、はい。確かに7歳で間違いないです」

「なら良いが…。まぁとにかく、その話し方は7歳の少年のものとしては少々変だな。その点で言えば、先程までの口調の方がそれらしかったかもしれん」

そ、そうなのか……？

何か地味にショックを受けてる俺を尻目に、シアリム氏の表情はいつの間にか真剣味を帯びていた。

「そう――だが、そうだな、君はまだ7歳だ。まだ幾らでもやりようがある。
これはまぁ老婆心だがね、これから先どうする気だ？　良ければ少しは相談に乗ろうと思うが」

「これから、ですか……」

はっきり言って、イルマステマの系譜は途絶えたも同然だ。
例え一族が滅びようと、探求を継続出来れば何の問題もなかった。だがしかし、先人の遺産、伝来の器具、それら全てが完全に喪われた今、そんな言葉は無意味だ。
それに、成り行きで引き継いでしまったが、本来自分は未だ家名を名乗る事を許されてはいなかった。
イルマステマを名乗れもしない者に、一族の研究の秘奥が明かされるはずもなく、引き継いだ知識は限定的。そもそも、今回の事件の原因についてでさえ、断片的な名称しか伝え聞いておらず、その機構や目的は知れないのだ。
唯一なんとかなりそうなのは魔術刻印くらいで、シアリム氏によれば何とか継承が可能かもしれないという事だが、焼け石に水の感は否めない。
ここまで色々と重なってくるとなると、まぁお先真っ暗と形容して何ら差し支えないだろう。

「懇意にしていた家門もないですし、どこかに弟子として入らせてもらうしかないでしょうが……」

「だが、それも難しい、か」

言われるまでもなくわかっている。

イルマステマはアトラス院の異端児だ。異端とは、端(はて)に立つ力があるからこそ孤独たり得る。
頼るべきコネクションも、渡すべき研究資産も失った今となっては、真っ逆さまに奈落へと転がり落ちるだけだ。

「私も多少は知人を当たってみるが……」

「ええ、ありがとうございます」

エルトナムもイルマステマに負けず劣らずの異端集団だ。
加えて、シアリム氏はエルトナムの中でも異端と聞いている。頼れるツテにも限度があるだろうし、そこまで頼る訳にもいかない。
だから、精々明るい声で言っておくことにした。

「その気になれば、なんとかどこかに潜り込めると思います。お気になさらず」

――正直に言おう。

後々考えると、これがある意味運の尽きだったわけだが、この時の俺はそんな事には全く気付かなかったのだ。だから、

「――まぁ、そうだな。君ほどの錬金術が形振り構わないとなれば、どこぞに潜り込む穴くらいはあるだろう」

なんて、シアリム氏の言葉に特段の意味を見出だすこともなく、この後もまったり談笑してしまったのである。

1．　目覚める時（後書き）

ルイス「で、結局俺が主人公？」

作者「Ｙｅｓ！　Ｙｅｓ！　Ｙｅｓ！」

ルイス「シアリム氏は？」

作者「次話参照」

ルイス「ふーん。で、次話っていつよ？　つーか５０００字ちょい書くのにどんだけかかってんの？」

作者「……」

ルイス「遅筆にも程があるだろ。あーあ、これだから……」

作者「お前、そんなに死亡フラグ立てられたいか？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5656y/

俺と童女と聖杯戦争

2011年11月24日19時50分発行